

論文

ヨハネ福音書における 贖罪論

高砂 民宣

キーワード

ヨハネによる福音書
贖罪論

目次

はじめに

- (1) 1 : 29, 1 : 36
- (2) 3 : 14 ~ 15
- (3) 6 : 53 ~ 54
- (4) 10 : 10b ~ 11, 17
- (5) 11 : 49 ~ 52
- (6) 12 : 1 ~ 8
- (7) 12 : 23 ~ 24
- (8) 13 : 6 ~ 8
- (9) 15 : 13
- (10) 18 : 28 ~ 19 : 16a
- (11) 19 : 16b ~ 27
- (12) 19 : 30
- (13) 19 : 33
- (14) 19 : 34
- (15) 20 : 23

おわりに

注

はじめに

第四福音書（ヨハネによる福音書）と共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ福音書）との間には、時間的記述における重要な相違が見受けられる。それは、イエスが十字架につけられる日が、一日ずれていることである。共観福音書によれば、最後の晩餐は過越の食事であり、ニサンの月の一四日にその食事は行われた。そしてイエスの逮捕と裁判はその日の夜に行われ、夜が明けると十字架刑は執行される。つまり、イエスが十字架につけられたのは、ニサンの月の一五日ということになる。しかし第四福音書によれば、この食事は「過越祭の前のこと」（13：1）となっており、最後の晩餐はニサンの月の一三日に行われた。共観福音書と異なり、第四福音書によると、最後の晩餐は過越の食事ではあり得ないことになる。第四福音書によれば、イエスはニサンの月の一四日に十字架につけられる。これは神殿で過越の犠牲が屠られる日である。

この過越祭はユダヤ教の三大祝祭の一つである。かつてイスラエルの民がモーセに率いられてエジプトを脱出した時、門に小羊の血が塗られたイスラエルの家は災いが過ぎ越した。しかし門に血が塗られていないエジプト人の家には災いが降りかかったのである。それにより、イスラエルの民はエジプト脱出が可能となり、後にそれを記念したのが過越祭である。第四福音書は特に、イエスが十字架についたのは、過越の小羊が屠られる「正午ごろ」（19：14）であったと主張している。一方、共観福音書ではイエスが十字架につけられたのは朝の九時となっている（マルコ 15：25）。そこには一日プラス三時間という時間のずれがある。ニサンの月一四日の正午頃にイエスが十字架につけられたということは、イエスこそ屠られる過越の小羊であることを意味している。イエスこそ、人間の罪を一身に背負い、執り成してくださる贖い主である、という神学的主張がそこにはある。まさに洗礼者ヨハネが証したように、イエスこそ「世の罪を取り除く神の小羊」（1：29）に他ならないのである。

第四福音書と共観福音書との時間的記述の相違は、それぞれの福音書記者が用いた資料の段階で既に異なっていたのかもしれない。しかし、各福音書記者が抱く神学的見解の違いから、時間的記述の相違は生じたとも考えられるのではないか。共観福音書記者は、聖餐式をキリスト教の新しい過越と見なした。それ故に、最後の晩餐は過越の食事ではならなかった。しかし第四福音書では、イエスを「世の罪を取り除く神の小羊」と見なす。少し強引な言い方かもしれないが、そうした神学的強調点の違いから、日付を始めとする若干の記述上の相違が生じたとも考えられるのではないだろうか。

本論文では、第四福音書の贖罪論について言及していると見なされている箇所を取り上げて、考察を進める。

(1) 1：29, 1：36 「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」

第四福音書の1章は、単なるプロローグではなく、イエスの役割を指し示すキリスト論的な称号や記述を多く含んでいる¹。特に1：29～34には、洗礼者ヨハネによる力強い宣言が記されている。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」（29節）。この「神の小羊」というキリスト論的称号は、36節でも繰り返される。洗礼者ヨハネの使命、それはイエス・キリストを証しすることである。

αἶψα（「取り除く」）という語は「除去する」、或いは「消し去る」という意味である。人間の罪を、イエス・キリストが身代わりとなって十字架につくことにより、帳消しにしてくださるということである。ここには明確な贖罪論を見ることができる。

イエスこそ、「世の罪を取り除く神の小羊」。このキリスト論的称号の根底には、旧約聖書に記された2つの出来事がある。

①出エジプト記12章には、過越祭に屠られる小羊の由来が記されている。エジプトにおいて過酷な強制労働を強いられていたイスラエルの民は、モーセに導かれてエジプトを脱出する。その出来事の発端は、イスラエルの民の家の鴨居に小羊の血を塗ることにより、神の怒りが過ぎ越したことによる。小羊の命が犠牲とされることにより、神はイスラエルの民の罪を赦されたのである。第四福音書記者は、他にも多くの出エジプトのモチーフを用いている（出エジプト記13：3～10「除酵祭」、出エジプト記29：38～46「日毎の献げ物」、等）。

また、旧約聖書に記された奴隷状態からの解放は、新約聖書においては罪の奴隷状態からの解放へと発展する。cf. Iコリント5：7、Iペトロ1：18～19。

②イザヤ書53章に記された救い主についての預言は、イエス・キリストにおいて成就する。そこには、イスラエルの民全体の罪をその身に引き受け苦しむ苦難の僕の姿が描かれており、それはイエスの死において現実の出来事となるのである。

続く1：35以下には、イエスの最初の弟子たちが、どのようなきさつでイエスに従うようになったかが記されている。第四福音書では、イエスに従った最初の弟子は二人であり、彼らは当初、洗礼者ヨハネの弟子であったと記されている（1：35）。二人の弟子たちは、自分たちの師である洗礼者ヨハネの証言に導かれ、イエスの弟子となる。洗礼者ヨハネの証言、それは「見よ、神の小羊だ」というものである（29節でも）。

後述するが、第四福音書は特に、イエスが十字架についたのは過越の小羊が屠られる時であったと主張している（19：14）。共観福音書ではイエスが十字架につけられたのは朝の9時となっている。そこには一日プラス三時間という若干のずれがある。それはイエスこそ、屠られる過越の小羊であるという神学的な主張がある。イエスこそ、人間の罪を一身に背負い、執り成してくださる贖い主なのである。

(2) 3：14～15 「そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。

それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」

民数記21：4～9には、「青銅の蛇」について記されている。エジプトを脱出したイスラエルの民は、砂漠の旅を続ける中で、神とモーセに不平を述べた。神は炎の蛇を民に向かって送り、その蛇によって噛まれた者の中から多くの死者が出た。恐れをなした民は罪を犯したことを懺悔し、蛇を取り除いてくれるようモーセに懇願する。モーセは民のために神へ執り成しの祈りを捧げた。そして神の命じるまま青銅の蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇に噛まれた者はそれを見上げると命を得た。

第四福音書の3:14～15には、この民数記21章に記された出来事が背後にあると考えられている。かつてエジプトを脱出したイスラエルの民は、荒れ野で青銅の蛇を仰ぐことによって罪を赦され、命を得た。それと同様に、十字架にかけられたイエスを仰ぐことにより、罪を赦され、永遠の命を与えられることが示されているのである。特に3:14の「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。」という文の中で、「上げる」には $\alpha\upsilon\lambda\omicron\omega$ という語が用いられている。この語は、イエスを十字架にかけるために上げることと、死人の中から天へと上げられるという二重の意味を持っている。つまり、十字架に上ることと天に昇ることが $\alpha\upsilon\lambda\omicron\omega$ という動詞で同一化され、十字架の受難と高挙とが等しいものとなっているのである。十字架上のイエスは栄光の姿として顯示されている、ということである。そして $\delta\epsilon\iota$ （「必要である」「ねばならない」）という語が示すように、キリストの死、十字架による贖罪は、神の必然なのである。

8:28にはまた、「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしはある』ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう」と記されている。人々はイエスを十字架につけることにより、イエスは何者であるかを知る、というのである。また、12:32には、「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」と記されている。イエスの十字架による贖罪によって、人々は神の支配へと引き寄せられるのである²。

(3) 6:53～54 「イエスは言われた。『はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。』」

6:1～15に記された「五千人に食べ物を与える」という奇跡物語は、四つの福音書全てに記されている重要なものである。第四福音書の記述で特徴的なのは、「ユダヤ人の祭である過越祭が近づいていた」（6:4）とあるように、奇跡が起こった時期を敢えて記している点である。第四福音書ではイエスの十字架上の死と過越祭とが、明らかに結び合わせて考えられている。イエスこそ真の過越の小羊であり、命のパンの与え手であることが、ここでは強調されているのである。

この五千人のパンの奇跡物語において、第四福音書で特徴的なのは、奇跡の後にイエスによる長い講話が続く点である。かつてイスラエルの民がエジプトを脱出し、荒れ野を旅した時、彼らはマナを与えられた。それを食べることによって、イスラエルの民は生き延びることができたのである。しかしこのマナを与えたのはモーセではなく神である、とイエスは断言する。そしてイエスこそ命のパンであり、モーセをしのぐ者であると、福音書記者は主張するのである。

さらに第四福音書の奇跡物語で特徴的なことは、旧約のエリヤ・エリシャ伝承と対応している点である。6章に記されたパンの奇跡に関して述べるならば、エリシャが大麥パン二十個で百人の空腹の人々を満腹にさせ、しかも彼らは食べきれずに残したという奇跡（列王記下4:42～44）に対応していることは明らかである。エリシャは大麥パン二十個で百人の人々を満腹にさせたが、イエスは大麥パン五個と魚二匹で五千人もの人々を満腹にさせる。イエスはエリシャの時よりも少ないパンで、

より多くの人々を満腹にさせるのである。ここには、イエスが旧約の預言者を遥かにしのぐ者であるという主張が根底にあると断言できる。

イエスはここで、ご自分こそが命のパンであると宣言される。そしてこの宣言を受けて、続く6：52～58では聖餐についての議論へと発展して行く。

イエスの肉を食べ、血を飲む。それは、十字架の上で裂かれたイエスの体と流された血に与かるということである。そしてそれによって永遠の命を与えられるのである。これは聖餐に与かることを意味している。キリスト者は聖餐に与かることによって、イエスがその人の内にいつもいてくださることを確信するのである。しかし人々は、イエスが言われたことを字義通りに解釈し、「肉を食べる」「血を飲む」といったグロテスクな言葉に耳を塞いでしまう。

旧約聖書には、血を飲むということが禁じられている。なぜならば血の中に、人間や動物の命があると考えられていたからである（レビ記17：14）。それゆえに、イエスの血を飲むということは、ユダヤ人にとっては受け入れ難いことであった。けれどもレビ記17：11に目を転じてみると、「血はその中の命によって贖いをする」と記されている。それは、血が神に献げられることにより、神との交わりに入れられるということである。つまり、十字架の死を通して神に献げられたイエスの命によって、人間の罪は贖われ、永遠の命を与えられる、ということである。

イエスは言われる。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」（6：54）。この箇所では τρώγω（「食べる」）という語が用いられている。この語は「噛み砕く」とか「食う」といった、粗野な意味を持つ語である³。ここでは何故このような語が用いられているのであろうか。それは、ユダヤ教の会堂とキリスト教の教会との間に激しい対立があり、そうした中で教会から遠ざかり、信仰を捨ててしまう人たちが現れ始めたからである（6：66）。かつて洗礼を受け、共に聖餐に与かっていた人たちの中から、脱落する者たちが出てきたのである。そこで福音書記者は、洗礼や聖餐が意味する内実を明らかにするために、敢えて聖餐に与かることの大切さを訴えているのである⁴。イエスを「命のパン」と確信し、聖餐に与かる必要性が強調されている。

6：60には、ユダヤ人たちだけでなく、弟子たちの中からも躓き、離れ去る者たちがいたことが記されている。けれどもそのような中で、ペトロは信仰を告白する。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています」（6：68～69）。多くの人々がイエスのもとから立ち去る中、ペトロはイエスこそ救い主であり、神の子であり、イエスに従い続けると告白する。なぜならば、イエスの内にこそ、永遠の命の言葉があるからである。

9：22や12：42、および16：2にも記されているように、第四福音書が書かれた当時、キリストの教会は、大きな動揺の中に置かれていた。ヤムニア会議において、ユダヤ教側はキリスト教会を異端であると宣言し、キリスト者たちは会堂（シナゴグ）から追放されていたのである。ヤムニア会議において、「十八祝祷（シエモネー・エスレー）」がユダヤ教の諸会堂で朗読されるようになっていた。その第十二祷には、キリスト者に対する呪いの文言が含まれていたのである。第四福音書には、この

ような当時のユダヤ教とキリスト教との対立が反映されている⁵。そうした出来事が、「実にひどい話だ。だが、こんな話を聞いていられようか」(6:60)という言葉に象徴されているのである。

イエスの言葉は、第四福音書が書かれた当時の、教会から発せられる宣教の言葉でもある。そしてペトロは、イエスを信じ、教会に踏み止まった人々を代表して、信仰を告白している。それゆえに彼は、「主よ、わたしたちは…」と一人称複数形で告白しているのである(6:68～69)。そして第四福音書記者は、この福音書を読む全ての読者に、同じように信じて告白することを祈り求めているのである。

(4) 10:10b～11、17 「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。わたしは良い羊飼いだ。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」「わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。」

第四福音書には、イエス・キリストがどのような御方であるかが、ἐγώ εἰμι+名詞(「わたしは…である」)という形で様々なものに譬えられている。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」(6:35)。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(8:12)。そしてこの箇所でも、イエスは「羊の門」(10:7)、さらに「良い羊飼い」(10:11節)に譬えられている。

羊はよく愚かな動物の代表であるかのように記される。しかし、羊たちは羊飼いの声を聞き分け、自分の名前を呼ばれると反応する。そして羊飼いは羊たちの先頭に立って彼らを導き、牧草地へと連れて行くのである。

第四福音書の10章には、旧約聖書の詩編23編が背景にあると考えられている。詩編23:1～4には、神と人間との関係が、羊飼いと羊に譬えられている。神こそが自分の人生を導く羊飼いである、と詩人は告白しているのである。

「主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる」(詩編23:3b)。自分の好きな所へ勝手に行って道に迷ってしまった羊を、良き羊飼いは血眼になって探し出し、正しい道へと連れ戻す。それと同様に、神はいつも守り導いてくださり、自分が間違った方向へ進む時、必ずや軌道修正してくださると詩人は告白している。

さらに第四福音書の10章には、エゼキエル書34章が背景にあると見なされている。そこではイスラエルの牧者たち、すなわち指導者たちが、自分自身を養うことだけに関心があり、群れを養うことをしないことが厳しく糾弾されている。そして主なる神は彼らに群れを飼うことをやめさせ(34:10)、神ご自身が群れを養い、憩わせる(34:15)と宣言される。

失われた羊を探し求めず、自分自身を養うことだけに関心を持つイスラエルの牧者たち。彼らは新約の時代におけるユダヤ教の指導者やファリサイ派の人々に当てはめられる。そして第四福音書の10章では、彼らを盗人や強盗、或いは雇い人に譬えている。彼らに共通する点は、自分の利益だけを追い求めているということである。それとは対照的に、良い羊飼いは羊のために命を捨てる(10:11)。ここに出てくる ὑπέρ(「…のために」)という語も贖罪の用語である。良い羊飼いが自らの命を

犠牲にすることにより、羊たちが命を得る、というのである。そして真の羊飼いであるイエスの声を聞き分けて従う者は、永遠の命を得るのである（10：28）。

この箇所では、「わたしは羊のために命を捨てる」（10：15）、「だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる」（10：18）と、イエスの十字架の贖罪が繰り返し強調されている。

第四福音書 10：7 でイエスは、「わたしは羊の門である」と宣言される。この語の前には ἀμὴν ἀμὴν λέγω ὑμῖν（「はっきり言っておく」）という、イエスが大切な教えを述べる時に前置きとして必ず言う言葉が付されている。イエスは良い羊飼いであると共に、羊の門であるというのである。10：9 には、イエスを通して入る者は救われ、その門を出入りすることによって牧草を見つける、と記されている。この句はまた、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」（14：6）という有名な聖句を想起させる。

(5) 11：49～52 大祭司カイアファによる無意識の預言

11：45～57 には、ラザロの復活を目撃した人々のうち、多くの人々がイエスを信じたことが記されている。しかし目撃した人々の中には、ファリサイ派の人々に密告する者もいた。

ユダヤ人は自分たちを神によって選ばれた民であると自負していた。それ故に、実際にはローマ帝国の支配下におかれていても、自分たち以外の民族を「異邦人」と呼んで軽蔑した。そして、いつの日か、強力な政治的指導者が現れ、自分たち選民をローマ帝国の支配から解き放ってくれると信じていた。そうした期待がイエスに向けられたのである。彼らはこの後、12：12 以下で、歓喜してイエスをエルサレムに迎える。「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。イスラエルの王に」（12：13）。しかしその数日後、イエスが自分たちの期待するような政治的メシアでないことが分かったと、手の平を返すように今度はイエスに対して ἀρον ἀρον, σταύρωσον αὐτόν（「殺せ。殺せ。十字架につけろ」）（19：15）と叫び出すのである。特にここで興味深いのは、共観福音書の並行箇所では単に「十字架につけろ」と記されているのに対し、第四福音書では ἀρον ἀρον（「殺せ。殺せ」）という言葉が付随している点である。この ἀρον という語は 1：29 に登場するキリスト論的称号「世の罪を取り除く神の小羊」の αἶψα（「取り除く」或いは「消し去る」）という語の二人称単数第一不定過去命令法である。こうしてみると、イエスが身代わりとなって十字架につくことにより、人間の罪を帳消しにするというキリストの贖罪を、ユダヤ人たちは思いも寄らない仕方です手を貸すことになるというアイロニーを、ここに見出すことが出来るのではないか。

11：47～49 には、ユダヤ教の祭司長たちがどれほどイエスを恐れていたかが明白に記されている。当時、「最高法院」はサンヘドリンと呼ばれ、祭司長たちやファリサイ派の人々で構成されるユダヤにおける宗教的な最高権威であった。この最高法院が招集され、ユダヤの指導者たちは、イエスに対する群衆たちの熱狂的な期待を何とかして沈めようと画策する。このまま放って置くと、人々はイエスを担ぎ出してローマ帝国に対してクーデターを起こしかねない。そうなれば、ローマの軍隊が導入され、ユダヤ全体が滅ぼされてしまうのではないかと、指導者たちは危惧したのである。

そうした中、その年の大祭司であったカイアフアが、イエスの殺害を発案する(11:49～50)。クーデターが起こる前にイエスを処刑し、ユダヤ全体の安寧を得ようとするのである。大祭司であるカイアフアは、祭司長やファリサイ派の人々に向かって、「あなたがたは何も分かっていない」(49節)と得意になって言うが、実は彼自身が本当には何も分かっていなかったことが後に明らかになる。大祭司といえば宗教上、最高の権威を持った存在である。ヘブライ人への手紙によると、大祭司は神と人間との仲立ちをする、宗教上最も重要な任務にある人物である。しかしカイアフアは、イエスを神の子と信じることができない。そればかりでなく、イエスこそ旧約聖書に預言されているメシアであることに気付かず、彼を殺そうとしているのである。しかし神は、そうした人間の愚かな考えを越えている。イエスが十字架につけられて殺されることにより、この世を救おうという神の御計画は、成し遂げられるのである。11:50の ὁπέρ という語は、「民の代わりに」よりも「民のために」と訳す方が適切であろう。罪のない御方が殺されることにより、民全体が救われる。イエスの死は代償死であり、贖罪死なのである。

そして大祭司であるカイアフアの提言の背後には、神の深い摂理がある。神の計画は、人の思いを遥かに越えている。例えば旧約聖書のイザヤ書44:24～28には、キュロスによる解放について記されている。神はバビロンの地で捕囚となっているイスラエルの民を解放するために、ペルシャ王キュロスという、異邦人をさえ用いたのである。そのように神は人間の思いを遥かに越えた、驚くような仕方御自分の計画を遂行される。まさに歴史を導かれる神なのである。第四福音書の11章でも、大祭司であるカイアフアは自分の意志とは異なる仕方で、最終的には神の計画に用いられることになるのである。

さらに11:52の言葉は重要である。イエスは「国民のためばかりでなく、散らされている神の子どもたちを一つに集めるためにも死ぬ」というのである。それはつまり、イスラエルの人々だけでなく、全世界の人々を、キリストにあって一つにするため、ということである。イエスという真の羊飼いによってすべての人が導かれ、最後には一つの群れとなる、というのである。

(6) 12:1～8 ベタニアにおける香油の注ぎ

第四福音書の12章には、「ベタニアでの香油の注ぎ」(12:1～8)、「エルサレム入城」(12:12～19)等、イエスの受難を目前にして、重要なことが記されている。「一粒の麦」(12:23～24)に言及する前に、「ベタニアでの香油の注ぎ」について短く触れておきたい。

この記事の冒頭には、「過越祭の六日前」(12:1)と日付が記されている。第四福音書によれば、イエスは神殿で過越の犠牲が屠られる時に、十字架につけられる。それ故に、「過越祭の六日前」という日付をあえて記しているのは、その時が目前に迫っていることを物語っている。それはまた、地上での最後の一週間に突入したことを意味している。非常に緊迫した状況であることが、直前の11:57の記述からも明らかである。

過越祭は、イスラエルの民が、かつてエジプトから脱出したことを記念して守られる祭である。仮庵の祭、五旬祭と並ぶユダヤ教の三大祝祭の一つである。過越祭の時には、パレスチナ全土から、お

よび他国に住むユダヤ人たちも、エルサレムの都に巡礼に来た。イエスもエルサレムに程近いベタニアに到着された。そこはイエスがラザロを死人の中から甦らせた場所である。イエスは歓迎され、夕食のもてなしを受ける。

そこにマリアが香油を持って登場する(12:3)。彼女が持ってきた「ナルドの香油」とは、インド原産の甘松かんしょうの根から搾り取った油である。それをマリアは1リトラも持ってきた。1リトラは約330グラムである。ナルドの香油はとても高価なものであり、それが330グラムというと、300デナリオンに値する。当時の労働者が一日働いて得る賃金が1デナリオンであったと言われる。故に、300日間の生活費に相当する額である。その高価な香油を、マリアはイエスの足に惜し気もなく塗った。このマリアの行為は、イエスを一心に愛し、敬うところから来ていた。

他の福音書の並行記事(マタイ26:6～13、マルコ14:3～9)と読み比べると、第四福音書の特徴が明らかになる。マタイ福音書とマルコ福音書では、この家は重い皮膚病(らい病)の人シモンの家である。また、女はイエスの「頭」に香油を注ぎかける。さらに、その出来事を見て憤慨したのは、マタイによれば「弟子たち」であり、マルコによれば「そこにいた人の何人か」であった。しかも両福音書とも、イエスの次の言葉で締めくくられている。「はっきり言っておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるであろう」。初代教会では、このマリアが行なったことは大へん象徴的な行為として語り伝えられた。

しかし第四福音書によると、マリアは香油をイエスの頭ではなく、足に塗ったと記されている。マリアは自分がイエスに香油を塗ることで、栄誉を与える等とは少しも考えていなかったのである。さらにマリアは、自分の髪でイエスの足をぬぐった。この行為には、兄弟のラザロを生き返らせて頂いたことへの心からの感謝と共に、イエスに対する尊敬の思いが込められている。イエスこそメシア(救い主)であるという、信仰の告白を体現したとも言えよう。

第四福音書の特徴の一つに、二重の意味がある。ここでも、香油を塗るという行為は、二重の意味を持っている。①高貴な人の死体に香油を塗るという習慣を暗示する。②旧約の時代、預言者や王が選ばれてその職務に就く際、その頭には油が注がれた。イスラエルの理想的な王となるダビデも、サムエルによって油を注がれ、聖別された。つまりイエスは十字架につけられることによって贖罪のメシアとして即位されるのであり⁶、イエスに香油を注ぐことは、独り子なる神としての戴冠式なのである。

(7) 12:23～24 一粒の麦

さて、12:20～26へ進もう。この箇所でも「祭りのとき」(20節)とあるように、過越祭の時であったことが明記されている。この間、ユダヤ人だけでなく、多くの異邦人たちもエルサレムに上って来ていた。その中に、数人のギリシア人がいた、と記されている(12:20)。ローマの信徒への手紙1:16にも、「私は福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです」とあるように、新約聖書では「ギリシア人」という語は、しばしば異邦人全体を指す時に用いられる。つまり第四福音書では、異邦人がここに登場することにより、

イエスの福音が世界的な広がりを持つものであることが明らかにされる。新しい時の始まりを意味しているのである。

イエスはここで、「人の子が栄光を受ける時が来た」と言われた(12:23)。この「栄光を受ける時」とは、十字架の時を意味している。イエスにとって栄光の時とは十字架の時であり、自らの死によって栄光を顕す時なのである。第四福音書において、イエスは度々「わたしの時はまだ来ていない」と言われた(2:4, 7:6)。しかしついに、イエスはその時が来たと言明する(12:23)。第四福音書では、十字架はイエスに委ねられた地上の業の完成であり、イエスは十字架の上で息を引き取る時に、「成し遂げられた」と宣言される(19:30)。また12:27では、「わたしはまさにこの時のために来た」と言われる。12:28の言葉(「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」)は、これまでイエスが為された数々のしるしと、これから行われるイエスの十字架の死を指しているのである。

12:23でイエスが「人の子が栄光を受ける時が来た」と言われた時、無理解な弟子たちは、「ついにローマ帝国を滅ぼし、イスラエル王国を打ち立てる時が来たのか」と誤解した。弟子たちを始め、人々はイエスに、この世の勝利を期待したのであった。しかし24節でイエスは彼らの期待とは全く異なることを言っている。それは十字架の死による勝利である。イエスが言う栄光、それは人々のためにご自身を献げることであった。

「一粒の麦」(12:24)の譬えにおいて、イエスは十字架につけられて殺されるが、三日目に甦ることを指している。一粒の種は大地に蒔かれることによって一度姿を消す。しかし後には芽を出して豊かな実を結び、予想を超えた大きな収穫をもたらすのである。死から命への転換、これがイエスの死に譬えられている。「死ねば、多くの実を結ぶ」(12:24)という言葉も、イエスの十字架の死が、多くのの人々のための贖罪の死であることは明らかである。

続く12:25～26には、イエスに従うキリスト者の歩むべき道が示されている。「自分の命(25節)」の「命」には、ψυχήというギリシア語が用いられている。これは自然の命、肉体的な命を指す。しかし「永遠の命」の「命」には、ζωήという語が用いられている。これは霊的な命を指す。「自分の命を憎む」という強烈な言葉は、人間はどこまでも自己中心的な存在である故、それほど強い決断がなくては、最後まで神に従うことはできないことを示している。そしてそれは、イエスとの生きた交わりの中で貫くことが出来る、と聖書は告げているのである。

(8) 13:6～8 洗足の出来事

第四福音書の13章には、「ヨハネによる福音書版 最後の晩餐」とも言える記事が記されている。共観福音書と比べると、その特異性は一目瞭然である。イエスによる洗足という記事は、第四福音書独自のものである。また、冒頭の1節から3節には、第四福音書記者独自の神学の主要素が凝縮して納められているといった感がある。

第四福音書では、まず初めに出来事があり、その後にイエスの独白・勧告が続く。この13章においても、1節から11節には洗足という出来事が記され、続く12節からは、その洗足(十字架による贖罪を指し示している)を基に、相互に愛し合い、仕え合うことが勧められている。

13:1に記された「御自分の時」という句は、神がイエスに栄光を与える時であると共に、イエスが十字架の死によって世を救い、神に栄光を帰する時を意味している。μεταβαίνω（「移る」）という語は、ある場所から他の場所へと移動することを意味する。ここでは、イエスの死が天への出発・帰還と見なされている。ちなみに5:24では、イエスの言葉を聞き、父なる神を信じる者は、死から命へと「移っている」と約束される。宗教改革者カルヴァンは、この語句に言及し、イエスの十字架死が神の御許に行くための入り口・通路であると述べている⁷。

父のもとへ帰還する時が近付いていることを悟ったイエスは、「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」。この「世にいる弟子たち」とは、直訳すると「世にいる自分の民」である。イエスは彼らを深く愛す。εἰς τέλος（「この上なく」）という語には、「最後まで」と「極限まで」という二重の意味が含まれている。これはヨハネの常套手段であり、イエスの愛が時間的・質的にいかに深いものであるかが示される。イエスの十字架は神の愛の極みであるが、これから起こる洗足は、その先取りなのである。

イエスは食事の席から立ち上がり、上着を脱ぎ始める（13:4）。τίθημι（「脱ぐ」）という語は、10:11、15、17および18節にも出てくるが、そこでは「捨てる」という意味を持つ。これは、良い羊飼いが羊のために命を「捨てる」という、イエスの十字架による贖罪を指す言葉でもある。それ故に、「上着を脱ぐ」という語句は、洗足の出来事とイエスの死との関係を示唆している。また、イエスは弟子たちの足を洗い終わった後に上着を「着る」（12節）が、このλαμβάνω（「着る」）という語も10:17に「再び受ける」という訳で登場する。これは復活を意味する言葉である。「わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してください」。

当時の道路は現在のように舗装されたものでなく、履物もサンダルであった。家に着く時、足はほこりや泥で汚れており、主人の足を洗うのは召使のする仕事であった。しかし足を洗うことは、何も奴隷だけがする仕事とは限らなかったようである。当時、妻は夫の足を洗い、子供たちは両親の足を洗った。それと同様に弟子たちは、自分たちのラビ（教師）に個人的な奉仕をするよう期待されていた。例えば列王記下3:11には、イスラエル王の家臣が預言者エリシャを紹介するにあたり、「エリヤの手に水を注いでいた、シャファトの子エリシャ」と呼んでいる。エリシャはエリヤの弟子であるが、ここでは「エリヤのもとで学んでいた」ではなく、「エリヤの手に水を注いでいた」と言及されている。このように、弟子が教師に仕えることは、教育を授かる以上に重要なことであった。そう考えてみると、イエスが弟子たちの足を洗ったということが、いかに驚くべきことであったかが理解される。しかもイエスは、弟子たちの足を順番に一人ずつ洗い始めたのである。イエスによる洗足は、十字架という究極的な神の愛の予告である。洗足の出来事は、フィリピの信徒への手紙に記された「キリスト讃歌」（2:6～11）とテーマが類似している⁸。両者に共通なのは、神の独り子が人類の救済のためにへりくだり、徹頭徹尾人々を愛されたということである。

13:6に記されたシモン・ペトロの言葉は、驚きと抵抗を示している。それはイエスの洗足という行為が、当時の社会的な慣習と真っ向から対立するものだったからである。社会的に地位が上の者は、下の者から奉仕されるのが当然であった。しかしイエスは、上着を脱いで弟子たちの足を洗うことに

より、こうした慣習を打破している。かつて洗礼者ヨハネも、イエスが洗礼を受けるために彼のところに来た時、それを思いとどまらせようとして言った。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか」(マタイ 3:14)。イエスはすべての人の罪を救うため、すべての人と同じようになるために、敢えて洗礼を受けたのである。全く罪のない「まことの人」が。そしてこの洗足の出来事においても、イエスは互いに愛し合い、仕え合うことを、身をもって示している。この神の子による謙遜の愛の頂点が、イエスの十字架である。

13:7に記されたイエスの言葉は、十字架と復活の後に、弟子たちはイエスの行為の意味を深く理解するようになるという予告である。同じことは、宮清め(2:22)とエルサレム入城(12:16)の場面でも予告されている。ペトロは、なぜイエスが死ぬ必要があるのか理解できない(13:36～38を参照)。しかし後に聖霊の導きによって、イエスの行為を理解できるようになる。イエスは言われる。「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(14:26)。

13:8でペトロは、イエスの愛(洗足／贖罪死)が分からない故に、それを受け入れることを拒否している。οὐ μὴ ... (「決して…しないでください」という語は否定を強調する語であるが、この語はあの「疑うトマス」の発言の中にも出てくる。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘後に入れてみなければ、わたしは決して信じない」(20:25)。イエスの復活を信じることができないトマスの、人間的な尺度からすべてを推し量ろうとする傲慢な思いが、ここにも表れている。

また共観福音書の中には、イエスがご自分の死と復活を予告された時、ペトロがイエスを「わきへお連れして、いさめ始めた」(マルコ 8:32)という記事がある。ペトロの中には常に、自分が描くイエス像というものがある。ペトロの拒否は謙遜のように見えて、実は傲慢なのである。彼はイエスを自分の理想像の中に押し込めようとした。しかし本当に大切なことは、イエスの言葉に聴き、素直に招きを受け入れることである。イエスの行為を拒否するペトロについて、カルヴァンは次のように述べる。「その奉仕をこぼみながら、かれは、自分の救いのかなめとなるものをこぼんでいるのである」⁹。

イエスはペトロに言う。「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」。この洗足は、我々に洗礼を想起させる。かつてイエスはニコデモに、「だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」と断言した(3:5)。そこでは確かに洗礼について言及されていた。しかし洗足は洗礼ではなく、イエスの十字架による贖罪を指し示している。イエスが一人ひとりの足を洗ったことは、イエスの十字架がすべての人の罪を贖うものであることを示している。

しかし13:11で、イエスは「皆が清いわけではない」と言われる。この言葉は、裏切り者のユダを指すと共に、後の時代に現れた教会からの離脱者を指している。これは第四福音書の二重舞台構造というものであり、生前のイエスの時代の人々と福音書が書かれた当時の人々の姿が重ね合わされているのである。それ故に、教会から離れ去って行く人々が、ユダという一人の人間に象徴されている。ユダも他の弟子たちと同様に、イエスによって足を洗って頂いた者である。しかし彼は、イエスによ

る謙遜の行為や愛（十字架による贖罪）について深く理解することができなかった。ユダは、その無理解の故にキリストの教会から離れ去って行く者の象徴として描かれているのである。

(9) 15：13 「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」

第四福音書の15：1～17において、イエスはご自分を「葡萄の木」に譬えておられる。イエスは敢えて、「わたしはまことの葡萄の木」と言われる。枝がまことの幹につながっている時、その枝は葡萄の実を豊かに結ぶ。幹の根は栄養分を吸い込み、その栄養分は枝々に行き渡り、枝は豊かに実を結ぶのである。

15：1～17には、μένω（「つながる」）という語が頻繁に登場する。イエス・キリストを信じ、つながり続ける時、人は神との生きた命の交わりを頂き、実を豊かに結ぶことが出来るのである。そしてイエスを信じる者は枝として、キリストの体である教会につながり続けるのである。

第四福音書が書かれたのは、1世紀の終わり近い紀元90年頃であろうと考えられている。その当時、ユダヤ教とキリスト教は、大きな対立の中にあった。一神教であるユダヤ教は、イエスをキリストと告白し、神の子と信じるキリスト教を、唯一神への冒涇と見なしたのである。そして既成の宗教であるユダヤ教は、当時新興勢力であったキリスト教を迫害した。9：22には「ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていた」と記されている。この言葉は、第四福音書が書かれた当時の時代状況を明白に物語っている。そうした迫害の時代の中にあっても、キリストの体である教会につながり続けよ、留まり続けよと、第四福音書は訴えているのである。ちなみに15：9、10の「とどまる」という語はギリシア語のμένωであり、「つながる」と同じ語が用いられている。

マタイによる福音書には、5章から7章にかけて、「山上の説教」が記されている。第四福音書では、この15章がそれに当たるとも言われる。「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全なものとなりなさい」（マタイ5：48）というイエスの教えは、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ15：13）と共通しているというのである。イエスご自身が、人類のために十字架につき、命を捨てられた。その贖罪の愛によって生かされる者は、隣人を自分自身のように愛することが出来る、というのである。

そして、隣人を自分のように見なし、互いに愛し合う人のことを、イエスは「友と呼ぶ」と言われる。15：15では、「僕」と「友」が対比して記されている。「僕」とはδοῦλος、すなわち奴隷である。奴隷という存在は主人に対して自由ではない。しかし友は自由なのである。律法や掟にがんじがらめにされるのではなく、自由な意志と喜びをもって、神を敬い、他者を愛するのである。

第四福音書の特徴の一つに、イエスの主導性というものがある。イエスは何事に対しても自ら行動され、それは十字架につくことにおいても同様である。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（15：13）という言葉にも見られるように、至上の愛は、まさにイエスの受難の時にこそ、明らかにされるのである。

(10) ピラトによる尋問 (18:28~19:16a) の中に見られる贖罪論

人々はイエスを総督官邸に連れて行くが、彼らは官邸の中に入ろうとしない。時は過越祭の準備の日の朝であったため、人々は異教徒の住居に入って汚れることを望まなかったのである (18:28)。使徒言行録 10:28 にも記されているように、ユダヤ人が異邦人と交際したり訪問することは律法で禁じられていた。そのようにユダヤ人は、全ての異邦人を汚れた者と見なしていたのである。しかし 18:28 の記述は非常にアイロニックである。何故ならば、イエスの死を望む一方で、汚れないように細心の注意を払っているからである。R・ブラウンが指摘するように、イエスを総督官邸に連行した人々は、自分たちが汚れることによって過越の小羊を食することができなくなることを恐れたのであるが、彼らは無意識のうちに神の小羊 (1:29) を死に引き渡し、真の過越を可能にしたのである¹⁰。こうしてイエスだけが官邸の中へ連行され、ピラトから尋問を受けることになる。

18:30~32 には、この尋問を避けたいとするピラトと、彼を利用してイエスを亡き者にしようとするユダヤ人を描こうとする福音書記者の意図が明白に表われている。ピラトはユダヤ人たちに、「あなたたちが引き取って、自分たちの律法に従って裁け」(18:31) と言い放つ。ピラトはユダヤの指導者たちがイエスを死刑にしようとしているが、彼らには死刑執行の権限がない故に、自分の所へ来たことを知っていた。つまり 18:31 の言葉は、ユダヤ人たちに自分たちの無力さを想起させる嘲りの言葉でもあると言うことができる。続く 18:32 のト書きのような言葉は、イエスを十字架刑によって亡き者にしようとするユダヤの指導者たちの陰謀が、実はイエスが既に予告されたことの成就に過ぎないことを明示している。イエスは 12:32 において、十字架の死を「地上から上げられる」という言葉で表現している。これは前述した旧約聖書の民数記 21:8~9 に記された内容と深い関わりを持っている。それは荒れ野の道中での出来事である。神とモーセに逆らう不信仰な複数の民が、蛇にかまれて死んでしまう。モーセは神の命令どおり、青銅で蛇を造り、旗竿の先に掲げた。すると蛇にかまれても青銅の蛇を仰いだ者は、命を得ることが出来たと記されている。この予言的なイメージが、ここでは意図されていると言えよう。これに関して、ブラウンの見解は適切である。「ユダヤ人は、全ての民がイエスを信じるようになる (11:48) ことを阻止するために、イエスを十字架につけようとする。しかし皮肉にも彼らは、イエスが全ての人をご自分のもとに引き寄せることが可能となるように、彼を地上から上げるのである」¹¹。このようにユダヤの指導者たちの陰謀は、図らずも神の救済計画に寄与することになるのである。

ピラトはイエスを官邸の外に連れ出し、最終的な判決を下すため、裁判の席に着かせた (19:13)。特にここでは καθίζω という語の正確な意味を巡り、重要な問題がある。それは裁判の席 (βήματος) に着いたのはイエスなのか、それともピラトなのか、という問題である。日本聖書協会発行の口語訳聖書では、裁判の席に着くのはピラトである。しかし同協会発行の新共同訳聖書では、ピラトがイエスを裁判の席に着かせたというように、他動詞的に解釈されている。καθίζω を自動詞として解釈することも、他動詞として解釈することも、文法的には可能である故に、結論を出すのは難しい。共観福音書の中では唯一マタイのみが裁判の席に言及しているが、そこに座っているのはピラトである (マタイ 27:19)。しかし W・ミークスが指摘するように、ペトロ福音書やユスティノス

の弁明では他動詞的に解釈され、「彼ら（兵士たち）はイエスを裁判の席に着かせ、『公正に裁いてください、イスラエルの王よ！』と言った」と記されている¹²。確かに5：27でもイエスは、父なる神が「裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである」と宣言している。こうしてみると、ここでの καθίζω については、他動詞として解釈するのが相応しいと思われる。もしもそうであるならば、ピラトは無意識のうちにイエスを真の裁き主と宣言したことになり、ここにアイロニーを見出すことができる。

また、ピラトがイエスを裁判の席に着かせた日時も注目に値する。「それは過越祭の準備の日の、正午ごろであった」と記されている（19：14）。共観福音書の記述（マルコ 15：42、マタイ 27：62、ルカ 23：54）と比べると、第四福音書だけが「過越祭の (τοῦ πάσχα)」準備の日と記している。

「神の小羊」であるイエスの死刑を宣告する裁判が、過越の小羊が神殿で屠られるのと同じ時刻に始まるというのもまた、大いなるアイロニーである。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」という洗礼者ヨハネによる預言（1：29）は、今まさに実現するのである。このように第四福音書記者は、日付と時間を記すことによって、イエスこそ真の過越の小羊であることを主張したと考えられる。

ピラトはユダヤ人たちにイエスを指して、「見よ、あなたたちの王だ」と告げる（19：14）。この宣言は先の「見よ、この男だ」（19：5）を反復しており、イエスに対する嘲りではなく、むしろ嘲りはユダヤ人たちに向けられている。驚くべきことに、祭司長たちはこの宣言に対し、「わたしたちには、皇帝のほかに王はありません」と返答している（19：15）。ミークスが指摘するように、「ユダヤ人の王」であるイエスを拒絶することにより、ユダヤ人たちは特別な神の民「イスラエル」であることを放棄し、皇帝に従属する単なる一つの異邦人（ἔθνη）となったのである¹³。換言すれば、選民であることを放棄し、ローマ帝国の属国であることを認めたのである。

11：47～48には、ローマ人が来て神殿や国民を滅ぼしてしまうのではないかという、祭司長たちの不安が記されていた。イエスをメシアと信じる者たちがイエスを擁立して王とし、ローマに対して反乱を起こすかもしれない。するとローマは軍隊を派遣し、イスラエルは滅ぼされてしまうのではないか、という危惧である。そうした不安や恐れを抱いた祭司長たちが、ローマの皇帝への忠誠を誓ったのである。この点においても第四福音書記者は、受難物語を實に入念に練り上げていると言えよう。ピラトは最終的に妥協して、イエスを十字架につけるためユダヤ人たちに引き渡してしまうのである。

(11) ゴルゴタの丘における贖罪論（19：16b～27）

この箇所を共観福音書と比べた場合、明らかな特徴が示される。それは、イエスが自分で十字架を最後まで背負って歩く点である（19：17）。第四福音書には、イエスに代わって十字架を担ぐキレネ人シモン（マルコ 15：21、マタイ 27：32、ルカ 23：26）は登場しない。ここにもイエスの主導性という第四福音書特有の神学が表れていると言えよう。イエスは 10：18 でも次のように言われた。「だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である」。この言葉からも明らかなように、イエスは徹頭徹尾主導性を貫くのである。クリュソストモスやフィロンといっ

た古代の注解者たちはここに、創世記に記されたアブラハムの子イサクの犠牲との関連を見出す。創世記 22:6 には、イサクが犠牲となるための薪を自ら背負ったことが記されている¹⁴。イエスが自ら十字架を背負って歩くことの予型をここに見ることも出来るが、第四福音書記者がそのことを意識してこの場面を描いたか否かを決定することは難しい。少なくとも言えることは、第四福音書記者がイエスの主導性を最後まで強調しようと意図したことである。ちなみに C・K・バレットは、ここに仮現論との闘いを見出す。第四福音書記者はキレネ人シモンがイエスの代わりに十字架につけられたというドケティスト（仮現論者）たちの見解を退けるために、イエスが自ら十字架を背負って歩いたことを明記したのではないかと述べている¹⁵。

ルカによる福音書 14:27 で、イエスは自分に従って来る群衆に対し、弟子の条件として次のように述べている。「自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない」。この言葉を加味すると、イエスが自ら十字架を担ぐ姿の中に、弟子の模範的な姿を意図したとも考えられる。また第四福音書の 17:18 では、イエスは自分を犠牲のいけにえと見なしている。「彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです」。このようにイエスは贖罪の業を完成するために主導性を貫くのである。

ゴルゴタの丘では、イエスを真ん中にして、その右と左には犯罪人が磔にされる。これはイザヤ書 53:12 の「罪びとのひとりに数えられた」という記述を想起させる。世の罪を取り除くイエスは、出エジプト記 12 章に記された過越の小羊であると共に、罪人の一人として数えられることにより、イザヤ書 53 章に記された「苦難の僕の歌」を成就するのである。

しかし第四福音書の強調点はそれ以外の点にもあると言えよう。共観福音書では、「一人は右にもう一人は左に、十字架につけた」（マルコ 15:27、マタイ 27:38、ルカ 23:33）となっているが、第四福音書では「イエスを真ん中にして (μέσον δὲ τὸν Ἰησοῦν) 両側に、十字架につけた」と記されている。記述に微妙な相違があるが、ここにもイエスの中心性、換言すれば主導性が強調されているように思われる。イエスと共に十字架につけられた二人の者を、マルコとマタイでは「強盗 (ληστής)」とし、ルカでは「犯罪人 (κακοῦργος)」と記している。しかし第四福音書では単に「ほかの二人」とのみ記しているだけであり、この人々についての説明は何も記されていない。第四福音書記者がここで意図していることは、十字架刑を王の即位式として描くことであり、共に十字架につけられる人々は、王の従者としての役割を担う者とされるという、一種のアイロニーをここに見出す学者もいるが¹⁶、興味深い見解である。ともあれ、第四福音書記者はこの後 19:32 でも、この二人の者たちに再度言及する。しかしそれは、彼らの足が折られるのに対して、イエスの足は折られなかったことを強調するためである。過越祭で食されるいけにえの羊の骨を折ってはならないという民数記 9:12 に記された掟が、イエスにおいて実現することを、第四福音書記者は強調しているのである。イエスこそ世の罪を取り除く神の小羊であるという神学は、一貫してこの福音書の根底を流れているのである。

19:23～24 には、籤引きについての記述がある。イエスを十字架につけた後、兵士たちは彼の衣服を剥ぎ取って四つに分け、四人で一つずつ自分のものとした (19:23)。当時のローマの習慣では、

兵士が囚人の衣服を自分のものとするのは職務上の特権であった¹⁷。しかし下着（χιτών）については分けないことに決めた。何故ならその下着は縫い目がなく、上から下まで一枚織りだったからである。共観福音書の記事と比較すると、第四福音書だけがイエスの下着について詳細な報告をしている。この一枚織りの下着は、大祭司が身に着ける聖なる祭服を想起させる。つまり第四福音書記者はイエスの下着についての詳細な報告を通して、イエスこそ真の大祭司であると主張していると考えられる¹⁸。

「下着」とも訳せる χιτών という語は、前述したように大祭司が身にまとう物であり、70人訳聖書（LXX）の出エジプト記28：4とレビ記16：4に登場する。だがそれらの記述には、「縫い目のない一枚織り」という表現は出てこない。しかし歴史家であるヨセフスの記述によれば、大祭司が身に着ける χιτών は二枚織りではなく、一枚織りの長い衣服である¹⁹。よって第四福音書記者は χιτών に言及することにより、イエスは真の王であると共に真の大祭司でもあることをほのめかしているとも考えることも出来よう。しかしリンダースやパレットといった学者たちによれば、χιτών は大祭司の祭服を暗示するものではないという²⁰。彼らの見解によると、一枚織りの χιτών についての言及は、兵士たちが籤引きで分け合った理由を説明する以外の何物でもないというのである。

筆者の見解では、第四福音書記者は χιτών についての記述によって、11：52に記されたカイアファの預言に関する説明（「国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ、と言ったのである」）を読者たちが想起することを期待していると思われる。「縫い目のない一枚織り」という句は、イエスの死によって一つに集められる群れ、すなわち信仰共同体である教会を暗示していると考えられる。また、「縫い目のない一枚織り」というこの句は、イエスの弟子たちが一つであることをも象徴していると思われる。17：21には次のように記されている。「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください」。

兵士たちは一枚織りの下着を見て、それを裂かずに籤引きを行い、誰のものになるかを決めようと話し合う（19：24）。レビ記21：10には次のように記されている。「同僚の祭司たちの上位に立ち、聖別の油を頭に注がれ、祭司の職に任ぜられ、そのための祭服を着る身となった者は、髪をほどいたり、衣服を裂いたりしてはならない」。なるほど、ここでは祭司が自分の祭服を裂くことが禁じられている。この禁令を考慮に入れると、兵士たちがイエスの下着を裂かなかったことは、イエスの祭司性を強調し明確にするという、アイロニックな響きを持つことになる。この場面ではまた、「わたしの着物を分け／衣を取ろうとしてくじを引く」という詩編22：19節の言葉を第四福音書だけが引用している。つまり兵士たちは、無意識のうちに旧約聖書の言葉を実現させたことになる。興味深いことに、イエスが十字架につけられて以降の場面について共観福音書と第四福音書を比べると、旧約聖書の成就という概念が第四福音書では繰り返し出てくる（19：24、28、36、37）。「聖書の言葉が実現するためであった（ἵνα ἡ γραφή πληρωθῇ）」というのはマタイによる福音書の常套句である。しかし興味深いことに、マタイの受難物語にはイエスのエルサレム入城以降、この定型句はマタイ26：56を除き、ほとんど出てこなくなる。反対に第四福音書の受難物語では、この定型句が頻繁に登場するのである。このことはつまり、第四福音書における一連の受難の出来事は、旧約聖書の成就とし

て理解されているということに他ならないのである。

しかし第四福音書におけるこの箇所には、悲しみという感覚は全く無いと言えよう。福音書記者の関心は唯一、旧約聖書の言葉が成就したという点のみにある。十字架刑によるイエスの死によって聖書の言葉が実現するという記述は、19：24、28、36、37にも見受けられる。イエスの十字架によって父なる神の計画は遂行されるということこそ、第四福音書記者が主張しようとしたことなのである。

旧約聖書からの数々の引用は、第四福音書の読者が聖書に関する知識をかなり持っていたことを示していると言えよう。カルベッパは次のように述べる。『『聖書が成就されるためであった』という定型句……や、度重なる旧約聖書の引用と暗示が意味していることは、聖書の成就によって、福音書記者の解釈する出来事の真実性が読者に立証されるということである』²¹。第四福音書記者は彼の証が真実であること（19：35）を、旧約聖書からの引用を用いることによって強調しようとしているのである。彼はまた、旧約聖書がメシアとして指し示しているのはイエスであることを明らかに強調している。

第四福音書記者はまた、「ぶどう酒をいっぱいに含ませた海綿」についても言及する（19：29）。第四福音書記者のみが、イエスはそのぶどう酒を受けたと記している（19：30a）。共観福音書によれば、酸いぶどう酒を含ませたこの海綿は、葦の棒に付けられていた（マルコ 15：36、マタイ 27：48）。しかし第四福音書では、海綿はヒソブに付けられている（19：29）。旧約聖書の出エジプト記 12：22には、過越の際にイスラエルの民はヒソブを犠牲の小羊の血に浸し、それぞれの家の鴨居と入り口の柱に塗ったことが記されている。つまり第四福音書記者は、イエスが息を引き取ろうとする直前の場面にヒソブの記事を記すことにより、イエスこそ新しい真の過越の小羊であることを強調したと言えよう。

(12) 19：30「成し遂げられた」―十字架の死による贖罪の御業の完成

イエスが息を引き取る場面について、第四福音書は共観福音書と大きな相違を見せている。マタイ福音書およびマルコ福音書において、イエスは「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と大きな声で叫ぶ（マタイ 27：46、マルコ 15：34）。しかし第四福音書におけるイエスはここでも徹底して能動的であり、「成し遂げられた τετέλεσται」と言うのである（19：30）。父なる神から与えられた業を、イエスは今や成し遂げたのである。この「業」について、第四福音書の他の箇所では次のように記されている。「イエスは言われた。『わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである』」（4：34）。「わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました」（17：4）。このように、父なる神から委ねられた業は今や、現実の出来事となるのである。「成し遂げられた τετέλεσται」という言葉についてブラウンは、「これはマルコとマタイに登場する明らかな敗北の叫びに取って代わる勝利の叫びである」と述べる²²。第四福音書記者は τετέλεσται という語を用いることにより、イエスは父なる神から与えられた業を勝利のうちに実現したことを強調する。イエスは十字架の上で、贖罪の業を完成されたのである。

(13) 19:33 その足は折らなかった。

19:31に記された日付(「その日は準備の日で、翌日は特別の安息日であった」)も重要である。翌日の安息日はニサンの月一五日で、過越祭の初日でもある聖なる日だからである。この「特別(μεγάλη)の安息日」は七年に一度訪れる、過越祭と安息日が重なる日である。第四福音書記者はこの日付を記すことにより、イエスは過越の小羊として栄光のうちに死に、それによって新しい時が始まったことを強調していると思われる。ちなみにC・K・バレットは、この「特別の」という語に関して興味深い見解を述べている。それは共観福音書と同様に、もしもこの安息日がニサンの月一六日であったとしても、レビ記23:11によると、収穫した穀物の初穂を捧げる日であり、μεγάλη「特別な」という語はさらに相応しいものとなるのである²³。さらに直ぐ後のレビ記23:12を読むと、この日には、初穂を差し出す際、無傷な一歳の雄羊を焼き尽くす献げ物として主に捧げることが決まっている。いずれにせよ、安息日が過越祭中の日であればより重要な日となり、過越が安息日に当たれば例外的な大祭日となる。つまり、第四福音書記者は「特別の安息日」という語を付加することにより、イエスは過越の羊として栄光の中に死を遂げたことに、より一層深い意義を持たせたと考えられる。

さて、ユダヤ人たちはイエスの遺体を取り降ろすよう、ピラトに願い出る(19:31)。そこには、十字架の上に掛けられた「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」という罪状書き(19:19)を即刻取り外したいという思いもあったと考えられる。ローマの通常の習慣では、遺体は見せしめとして十字架上に放置されたままであった。しかしフィロンによると、特に祭りの時には遺体は取り降ろされ、身内の者たちに受け渡されたという²⁴。いずれにせよ、ユダヤ人たちがイエスの遺体を取り降ろしてほしいと願ったのは、申命記21:23に次のように記されているからである。「死体を木にかけたまま夜を過ごすことなく、必ずその日のうちに埋めねばならない。木にかけられた者は、神に呪われたものだからである。あなたは、あなたの神、主が嗣業として与えられる土地を汚してはならない」。つまり、汚れないために、十字架にかけられた遺体はその日のうちに片付けるべきであるというのである。イエスをピラトに引き渡す時も、ユダヤ教の指導者たちの関心事は、祭儀的な清浄を保つことであった(18:28)。前述したように、彼らは無意識のうちに神の小羊であるイエスを死に引き渡すのであるが、これによって真の過越が可能になるというアイロニーが根底を流れていると言えよう。

ユダヤ人たちはイエスの遺体を取り降ろす際、その足を折るよう、ピラトに願い出ている。この「足を折る」という残酷な刑罰はcrurifragiumと呼ばれるもので、残虐な刑罰に思えるが、死を早めることによって苦しみから解放するという慈悲深いものでもあった²⁵。しかしイエスは既に死んでいたため、兵士たちはその足を折らなかった(19:33)。この出来事は、イエスこそ過越の小羊であるというテーマがここにも反響しているということである。出エジプト記12:46には、次のような規定が記されている。「一匹の羊は一軒の家で食べ、肉の一部でも家から持ち出してはならない。また、その骨を折ってはならない」。このようにイエスの死は今や、ユダヤ教の過越に取って代わる新しい過越として位置づけられたと言えよう。また、詩編34:21には、神に従う人について、「骨の一本も損なわれることのないように／彼を守ってくださる」と記されている。第四福音書記者はここでも、旧約聖書の言葉がイエスの死において実現したことを強調していると言えよう。

(14) 19:34 しかし、兵士の一人が槍でイエスの脇腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。

兵士たちはイエスの足を折らなかった。その代わりに、イエスのわき腹を槍で突き刺す。すると、そのわき腹から血と水が流れ出たと記されている (19:34)。第四福音書記者はこの記述を通して、イエスは本当に死なれたという証拠を与えようと意図していると共に、イエスの人性を強調しようとしていると考えられる²⁶。またこの記述によって、プロローグに記されていること、すなわち、言であるキリストが受肉し、人間の間に宿ったこと (1:14) を読者に再び想起させようと意図しているとも思われる。第四福音書記者は、言であるキリストが私たちと同じ人間としてこの世に生まれ、死なれたことを強調していると考えられる。

19:37 もまた、旧約聖書のゼカリヤ書 12:10 からの引用であり、そこには次のように記されている。「彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ、独り子を失ったように嘆き、初子の死を悲しむように悲しむ」。これは神によって選ばれた民、すなわち選民でありながら、メシアを殺した者たちに対する厳しい糾弾の言葉である。しかしこの箇所では、ヨハネの黙示録 1:7 と同様に、救済の預言として引用されているのである。

19:34b の「血と水とが流れ出た」という記述には、豊かな意味が含まれている。第四福音書には、イエスを信じる者たちに、血と水は命を与えることが記されている (3:5、4:14、6:53～56、7:38、13:5～10)。血と水はまた、イエスこそ過越の小羊であることを示している。J・M・フォードによれば、この「血と水」という語は、ユダヤ教の口伝律法を結集したミシュナの中のおホロート 3:5、フリーン 2:6、およびペサヒーム 5:5、8 に見受けられるラビ的概念に影響を受けているという²⁷。例えばミシュナのペサヒーム 5:1 には、犠牲の動物は過越祭の前日に屠られることが記されている²⁸。祭司は犠牲獣の血を祭壇の上に一気に注ぐが、その血は「混じり合った血」と定義されている (ペサヒーム 5:8)²⁹。それが過越の小羊の「混じり合った血」であり、この血は我々をあらゆる罪から清めるのである (I ヨハネ 1:7)。「ヒソブ」(19:29) と「砕かれない骨」(19:33、36) および「混じり合った血」(19:34)、これら三つの事柄により、第四福音書記者がイエスを過越の小羊として描こうと意図していることは明らかである。以上のように、この場面は福音書記者によって非常に巧妙に描かれていると言えよう。

また、イエスのわき腹から流れ出る血と水は、聖餐と洗礼を象徴していると考えられる。先にイエスは 7:38 で、「わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」と宣言している。「その人の内から」は ἐκ τῆς κοιλίας αὐτοῦ であり、κοιλία は「腹」を意味する語である。これは「血と水」がイエスの「わき腹 (πλευρά)」から流れ出たという 19:34 の言葉とつながりを持つと言えよう。

さらに血と水は、ヨハネの手紙一の 5:6～8 に記された、次の言葉を想起させる。「この方は、水と血を通して来られた方、イエス・キリストです。水だけではなく、水と血とによって来られたのです。そして、“霊”はこのことを証しする方です。“霊”は真理だからです。証しするのは三者で、“霊”と水と血です。この三者は一致しています」。リンダースはヨハネの手紙一の 5:6～8 に記されたこの言葉は、ヨハネによる福音書 19:34 の言葉に鼓舞して書かれたものであると見なしている³⁰。

一方、ブルトマンはヨハネによる福音書19:34bと35節を教會的編集者による付加であると見なし、この教會的編集者は3:5と6:52b～58も付加した人物であると主張している³¹。3:5には次のように記されている。「イエスはお答えになった。『はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない』」。しかしこれらの記事が第四福音書記者によるものか、或いは教會的編集者によるものかを判別することは困難である。いずれにせよ、主の晩餐と洗礼は、「水と血」という言葉により、イエスの十字架に基づくものであることが強調されているのである。イエスの死は命を与えるものであるという救済と結び合わされており、洗礼と聖餐は、イエスの死に起源を持つということが強調されているのである。

(15) 20:23 「誰の罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。誰の罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

20章の前半である1～18節には、復活されたイエスが、マグダラのマリアに現れたことが記されていた。週の初めの日、すなわち日曜日の朝にマリアに現れた復活の主は、同じ日の夕方、今度は弟子たちの前に姿を現されたのである(20:19～23)。

弟子たちはユダヤ人を恐れていた。「自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」(20:19)という言葉から、弟子たちがどれほどユダヤ人を恐れていたかが窺える。家の中のすべての戸に、鍵が嚴重に掛けられていた。しかしどれほど嚴重な鍵であろうとも、復活のイエスを遮断することはできなかった。人間を遮断することはできても、神の力を遮断することはできないのである。イースターの朝、大きな石で墓穴が塞がれていたにもかかわらず、復活の主はそこから出て来られた。それと同じように、しっかりと家の戸に鍵をかけたにもかかわらず、イエスは、まったく自由に、家の中に入って来られたのである。そして言われた、「あなたがたに平和があるように」。そしてイエスは、ご自分が十字架につけられ、殺された当人であることを証明するかのように、手とわき腹とをお見せになった。それを見て、弟子たちは非常に喜んだ(20:20)。

復活の主イエスは、弟子たちに息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい」と言われた(20:22)。創世記2:7には、神が人間を創造された時、「その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」と記されている。つまり聖霊を受けるとは、復活の主イエスの命を受けることを意味している。復活されたイエスによって、新しく創造されるということである。それは新しい信仰共同体としての教會の誕生を意味する。これはペンテコステを先取りする出来事であり、その根本は罪の赦しである。イエスを見捨てて逃げてしまった弟子たち。そのような弟子たちの前にイエスは再び現れてくださり、彼らの罪を赦してくださった。ここにもイエスの十字架の死による罪の贖いが根底にある。そして今や、罪を赦す權威を、イエスは弟子たちに委ねられたのである。

松永希久夫が指摘するように、第四福音書の記述が共観福音書と異なる点は、赦罪の權威が生前のイエスから与えられる(マタイ16:19)のではなく、復活されたイエスによって与えられる(ヨハネ20:23)点である。また、ペトロ個人に与えられるのではなく、弟子たちの共同体に与えられている点である。プロテスタントの教會觀は、ここに重要な典拠を持つと松永は述べているのは興味深い³²。

聖霊を受けた弟子たちは、イエスの復活の証人として、この世に派遣され、初代教会を築いた。彼らはイエスの十字架による贖罪に基づく謝罪の権威を携えて、伝道の業に尽力したのである。

おわりに

以上、本稿では第四福音書の贖罪論について触れていると思われる箇所を検討した。ブルトマン学派の間では、贖罪論は第四福音書の中に位置を与えられないが、「神の小羊」は明確に贖罪論的モチーフを持っている³³ということが、本稿を通して裏打ちされたとと言えるのではないか。イエスこそ、屠られる過越の小羊。イエスこそ、人間の罪を一身に背負い、執り成してくださる贖い主。第四福音書には一貫して、こうした贖罪信仰が根底を流れているのである。

注

- 1 山岡 健は1:34で「神の子」の代わりに西方型の一部の写本では「神の選び人」という読み方が採られている点に着目し、1章には①「神の小羊」、②「神の選び人」、③「ラビ」、④「メシア」、⑤「神の子」、⑥「イスラエルの王」、⑦「人の子」といったように、7つの称号が記されていることを指摘する。そして7という数字はセムの思考における完全数であることを指摘している。山岡 健「神の小羊—ヨハネによる福音書1:29～34 注解」『キリスト教と文化』(12)、1997年、62頁。
- 2 松永希久夫・山岡 健著、『ヨハネによる福音書』『新共同訳 新約聖書注解I』、日本基督教団出版局、1991年、496頁。
- 3 荒井 献・H・J・マルクス監修、『ギリシア語 新約聖書釈義辞典Ⅲ』、教文館、1995年、416頁。
- 4 松永希久夫著、『ヨハネ福音書新解1 ひとり子なる神イエス』、ヨルダン社、1987年、218頁。
- 5 詳細については、J・L・マーティン著、『ヨハネ福音書の歴史と神学』(原義雄・川島貞雄訳)、日本基督教団出版局、1984年を参照せよ。
- 6 松永・山岡著、前掲書、490頁。
- 7 カルヴァン 新約聖書注解IV『ヨハネ福音書』下 山本功訳、新教出版社、1965年、437頁。
- 8 G. R. Beaseley-Murray, *John*, (Dallas: Word Books, 1987), p.239.
- 9 カルヴァン著、前掲書、439頁。
- 10 R. E. Brown, *The Gospel According to John II*. (New York: Doubleday, 1966), p. 866.
- 11 *Ibid.*, p.867.
- 12 Wayne A. Meeks, *The Prophet-King: Moses Traditions and the Johannine Christology*. (NovTSup 14., Leiden: Brill, 1967) , p.73.
- 13 *Ibid.*, p.76. 尚、E・シュタウファーはこれを祝祭の神の都の真ん中で、神の民の祭司長によってなされたローマに対する忠誠の大宣言であり、皇帝礼拝に他ならないと厳しい批評を加えている。E・シュタウファー著、『イエス—その人と歴史—』(高柳伊三郎訳)、日本基督教団出版部、1962年、185頁。
- 14 C. K. Barrett, *The Gospel According to St. John*. 2d ed. (Philadelphia: The Westminster Press, 1978) , p.548.
- 15 *Ibid.*, p.548.
- 16 Donald Senior, C. P., *The Passion of Jesus in the Gospel of John*. (Collegeville: The Liturgical Press, 1991), p.103.
- 17 Digest (Libri Pandectarum) XLVIII, XX, 6., Barrett, *op. cit.*, p.550., also Brown, *op. cit.*, p.902.
- 18 Brown, *op. cit.*, p.920.
- 19 F. Josephus, *The Antiquities of the Jews*, (trans. W. Whiston; Peabody, MA: Hendrick son, 1987); Book 3, chapter 7, #161.
- 20 Barnabas Lindars, *The Gospel of John* (Grand Rapids: Eerdmans, 1972), p.578., Barrett, *op. cit.*, p.550.

- 21 R・A・カルペッパー著、『ヨハネ福音書文学的解剖』（伊東寿泰訳）、日本キリスト教団出版局、2005年、311頁。
- 22 Brown, *op.cit.*, p.930.
- 23 Barrett, *op.cit.*, p.555.
- 24 Philo, *In Flaccum* X ;#83., Brown, *op.cit.*, p.934.
- 25 *Ibid.*, p.934.
- 26 Barrett, *op.cit.*, p.556.
- 27 J. M. Ford, “‘Mingled Blood’ from the Side of Christ (John XIX.34)”, *NTS* 15 (1968/1969), p.337-338.
- 28 『ミシュナ ペサヒーム』 石川耕一郎訳、エルサレム宗教文化研究所、1987年、36頁。
- 29 前掲書、42頁。
- 30 B. Lindars, *The Gospel of John*. New Century Bible Commentary., Grand Rapids: Eerdmans, 1972., pp.588-589.
- 31 R. Bultmann, *The Gospel of John* (Trans. and ed. George R. Beasley-Murray, Philadelphia: The Westminster Press, 1971), p.678.
- 32 松永・山岡著、前掲書、534頁。
- 33 松永希久夫著、「神の小羊—第四福音書の贖罪論的モチーフについての予備的考察」『松永希久夫著作集 第2巻 ヨハネの世界』、一麦出版社、2011年、129頁。
 尚、伊東寿泰は第四福音書が贖罪論についてどのように語っているかを、文学的方法、特にスピーチアクト方法を用いて精密に分析し、第四福音書は「初めから終わりまで贖罪信仰について豊かに語っていて、それはこの福音書の中心的な思想・神学の一つなのである」と結論を述べている。伊東寿泰著、「ヨハネ福音書における贖罪信仰—文学的方法による分析—」『聖書学論集 45』、日本聖書学研究所、2013年、176頁。